

受動と完了(2)

—「ヘーリアント」における受動：ギリシャ語・ラテン語・
ゴート語聖書, タツィアーン, 「オトフリート」との比較——

志 田 章

1. 序

本来、総合的言語であった印欧語は、歴史とともに分析的言語へとその姿を変えてきた。受動及び完了を例に取るなら、総合的形式で書かれた言語として、例えば古代ギリシャ語を挙げることができる。そして、この古代ギリシャ語で書かれた聖書を翻訳したと言われている、紀元4世紀中葉頃の東ゲルマン語の一つであるゴート語では、それらは現代語で行われているように〈sein〉〈werden〉〈haben〉と過去分詞という組み合わせで表現されるようになり、いわゆる総合的な受動及び完了形は見られなくなった¹。この傾向はそれ以後受け継がれ、西ゲルマン語にはっきりとその例証を残している。即ち古高ドイツ語・古ザクセン語・古英語には、上記の受動と完了の形式が多く用いられている。しかし古ドイツ語と古英語の分析的な受動と完了の諸形式は、意味的或いは統語的観点については現代ドイツ語とは異なっていることが少なくない。その一つとして、9世紀におけるこれら西ゲルマン語の受動の統語形式は、4世紀のゴート語と比べてみる限りでは、ある程度の定着を窺わせるものの²、その意味的な面では明確でないこともある。つまり現代ドイツ語で言われる事象受動(Vorgangspassiv)と状態受動(Zustandspassiv)³の統語形式が、一定していないという点である(もし当時両受動を区別していたのであるなら)⁴。そしてこの二つの受動形式は、時称を示す文法的手段としても使われているのである。

2. 古ザクセン語「ヘーリアント」の受動

古ザクセン語においては受動は *uuerðan* か *uuesan* に過去分詞を加えて表された。一般的に述べるなら現代ドイツ語の場合と同じように、古ザクセン語でも事象受動を表す時の形式は *uuerðan*+P.P. であり、状態受動を表す場合の形式は *uuesan*+P.P. である⁵。しかし、例外もいくつかあり、ホルトハウゼンは常に *uuesan* を取る他動詞として *ginemnan* と *hêtan* を挙げている。しかし、同じ特徴をもつ他動詞は他にもある。

古ザクセン語で書かれた「ヘーリアント」(以下 Hel. と略す)の中で、分析的な受動文で使われている他動詞は88個あり、これらの動詞を使った *uuerðan* に依る受動は112例、*uuesan* に依るものは140例、合計252例確認できた。この中で *hêtan* が16回で最も多く用いられ *lêdian* *stellian* 等は1回ずつである。以下でそれぞれの動詞の例文を挙げ、事象受動か状態受動かを吟味し、統語と意味の整合性について調べ、分析的な受動形式の定着を調べる一助としたい。また以下では「ヘーリアント」からの例文に対応する箇所がゴート語(以下 Got. と略す)、「タツィアーン」(以下 Tat.) 及び「オトフリート」(以下 Otf.) のいずれかにある場合は、「ヘーリアント」からの引用文の後で、それを挙げることにする⁶。

1. *giberan* (got. *gabairan*, and. *gaberan*, nhd. *gebären*)

a) mit *uuerðan* (使用回数10回)

- 1) *hiet that ic thi thoh gicûðdi, that thi kind giboran,/fon thînera alderu idis ôdan scoldi uuerðan an thesero uueroldi, uuordun spâhi* (123-125). (Luk. 1, 13)

([神は] 命じた、私 [ガブリエル] が汝に伝えるよう、汝に子供が生まれるはずであると/汝の年老いた妻から授けられるはずであると/この世に：言葉に賢い子が。)

(Got.) *jah qens þeina Aileisabaiþ gabairid sunu þus*

(Luk. 1, 13)

(そして汝の妻エリザベートは汝の子を生むであろう)

(Tat.) inti thin quena Elysabeth *gibirit* thir sun (2, 5)

(そして汝の妻エリザベートは汝の子を生むであろう)

(Otf.) Joh altquena thinu *ist* thir kind *berantu*,/sun filu zeizan (1-4-29 f.)

(そして汝の年老いた妻は汝の子を生むであろう／まことにかわいい男の子を)

「ヘーリアント」の希求法・過去の受動文に対してゴート語、「タツィアーン」、「オトフリート」では直説法・現在の能動文である。また「ヘーリアント」では頭韻を踏むために *uuerðan* が次行に回され、定動詞 *scoldi* より後ろに置かれている。

残りの9例を挙げる。

2) êr than⁷ thi magu *uuirðid*,/fon thînero aldero idis erl afôdit,/kindiung *giboran* cunnies gôdes,/uuânnum te thesero uueroldi (165f.)

(汝に息子が／汝の老いた妻から男の子が生まれるまで／高貴な一族の子が生まれるまで／すばらしき子がこの世に)

この例は未来における行為を表している。

3) that iru an them sîða sunu ôdan *uuarð*,/*giboran* an Bethleem barno strangost,/allaro cuningo craftigost: (369ff.)

(彼女 [マリア] に旅の途中で男の子が授けられる／ベツレヘムで子供の中で最強の者が生まれることを／あらゆる王の中で最も力ある者が)

4) huar Krist *giboran*/an uueroldrikea *uuerðan* scoldi,/friðugumono bezt (617f.)

(どこでキリストは／この世に生まれてくることになっているのか／平和をもたらす者で最高の者は)

(Tat.) uuar ist ther thie *giboran ist* Iudeno cuning? (8, 1)

(ユダヤ人の王として生まれた方はどこにいるのか)

(Otf.) war Krist *giboran wurti* (1-17-34)

(どこでキリストは生まれたのか)

「ヘーリアント」からの例は、助動詞 *scoldi* を用いて、未来における事象を表している。しかし「タツィアーン」は *giboran ist* と完了形で書かれている。このラテン語原文も、分析的な完了形で *ubi est qui natus est rex Iudeorum* (Mat. 2, 4) とあり、「タツィアーン」は原文に従っていることが分かる。「オトフリート」の例は、間接話法の中で使われている接続法だが、「タツィアーン」と同じく、時称は完了的な意味合いを含んでいるように思われる。従って、ここでは「ヘーリアント」だけが未来時称で書かれていることになる。

5) *that he scoldi an Bethleem giboran uuerðan*: (621)

(彼 [キリスト] はベツレヘムで生まれることになっている)

6) *allaro barno bezta, thero the io giboran uurði/magu fon môdar* (835f.)

(かつて生まれたあらゆる子の中で最高の者/母から生まれた息子の中で)

この例は、過去における行為を表している。

7) *sô manag barn umbi Bethleem, sô filo sô thar giboran uurði*, (731)

(ベツレヘムで生まれたできるだけ多くの子供を)

8) *betera mikilu, that he gio giboran ni uurði* (4584)

(彼は生まれてこないほうがずっと良かったことを)

9) *Te thi uuarð ik an thesar uueroldi giboran* (5225)

(それゆえに私 [キリスト] はこの世に生まれた)

(Got.) *ik du þamma gabaúrans im.* (Joh. 18, 37)

(Tat.) *Ih bin in thi uuarð giboran* (195, 6)

(Otf.) *joh ward giboran ouh zi thi u* (4-21-30)

「ヘーリアント」の例は、過去における単なる行為を表しているように思える。しかし、ゴート語、及び「タツィアーン」の両例は、原文に倣い *uuesan* を使った完了形になっている。ただし、ギリシャ語の原文は *εἰς τοῦτο γενένημαι* で、総合的な能動・完了形であるのに対し「タツィアーン」の原文は *Egô in hâc natus sum* とあり、分析的な完了形である。

これらの聖書の記述から考えてみるなら、「オトフリート」と「ヘーリアント」の例は、単なる過去の出来事ではなく、完了的な事象を表している、と考えられる。

10) allaro barno bezt, thero the io *giboren uurði* (5267)

(訳は上記 6) 参照)

b) mit wesant (4回)

1) nu is Krist *gebora*/an thesaro selbun naht, sâlig barn godes,/an thera Dauides burg, drohtin the gôdo. (399ff.)

(今キリストが生まれた／同じ夜に、至福な神の子が／このダビデの町に、良き主が)

(Got.) þatei *gabaurans ist* izwis himma daga nasjands,

(Luk. 2, 11)

(汝らのために、今日救世主がお生まれになったのだから)

(Tat.) bithiu uuanta *giboran ist* iu hiutu Heilant (6, 2)

(なぜなら、汝らのために今日救世主がお生まれになったのだから)

(Otf.) *Miuwiboran habet* thiz lant den himilisgon heilant

(1-12-13)

(新しくお生まれになった方を、この国は天の救世主を持つ)

「ヘーリアント」、ゴート語及び「タツィアーン」では *wesant* と過去分詞に依る受動形を用い、「オトフリート」はこれらと異なり形容詞 *niuwiboran* と *habên* で表現している。ゴート語からの引用文は、原典 (*τίκτω* [gebären] のアオリスト・受動 *ἐτέλθη* で書かれている) から判断するなら *wesant* の現在形 *ist* ではなく過去形 *was* を用いたほうが妥当ではないかと思われる。他方「タツィアーン」のラテン語原典では受動・完了 *nâtus est* とあり、「タツィアーン」はこれを逐語訳している。この「ヘーリアント」の例 1) も、完了を表していると考えられるが、ラテン語との関係は明らかでない⁸。

- 2) the cuning is gifôdit,/*giboran* bald endi strang: (598f.)
 (王 [キリスト] は生まれた / 生まれた, 勇敢で力ある者が)
- 3) sô thar *uuas* the hêlago Krist,/*giboren* that barn godes
 (2665f.)
 (そこで [ガリレア] 神聖なキリストは / 生まれた, 神の子は)
- 4) thanan he cunneas *uuas*,/*giboran* fon them burgiu (347f.)
 (種族に関しては彼はそこの出であった / その町で生まれた)
 (Tat.) ther heilant *giboran uuard* in Bethleem (8, 1)
 (救世主はベツレヘムでお生まれになった)

2) は現在完了的な用法と考えられ, 3), 4) は過去形で出身を表している。この「タツィアーン」からの例は, 対応する箇所ではないが, *uuerdan* の過去を使って出身を表している。この原典は *nâtus esset* で接続法, 受動過去完了である。

2. hêtan (got. haitan, ahd. heizan, nhd. heißen)

a) mit *uuesan* (16回) [*uuerðan* との例は無い]

1) Zacharias *uuas* hie *hêtan* (76)

(ザカリアと彼は呼ばれていた)

(Got.) was in dagam Herodes þiudanis Iudaias gudja *namin*
 Zakarias (Luk. 1, 5) (ユダヤの王ヘロデの時代にザカリア
 という名の司祭がいた)

(Tat.) *Uuas* in tagun Herodes thes cuninges Iudeno sumer
 biscof *namen* Zacharias (2, 1)

ゴート語 *namin* (sg. dat.) と Tat. *namen* (sg. dat.) はそれぞれ原典の *ὄνοματι* (sg. dat.) 及び *nomine* (sg. abl.) を訳している。

2) Gabriel *bium* ic *hêtan* (120)

3) Maria *uuas* siu *hêtan* (252)

4) Simeon *uuas* he *hêtan* (468)

(Got.) þizei namo Swmaion, (Luk. 2, 25)

(Tat.) *thes namo uuas gihezzan* Simeon, (7, 4)

ゴート語 (*pizei* [関係代名詞 m, sg, gen.] の例文はギリシャ語原典 ϕ *ἄνομα Συμεῶν*, (ϕ [関係代名詞 m. sg. dat]) を大体そのまま訳している。しかし「タツィアーン」は原典 *cui nōmen Symeōn* (*cui*[関係代名詞 m. sg. dat.] *nomen* [n. sg. nom.]) には無い *uuesan* の過去形 *uuas* が加えられ、分析的な表現に書き換えられていることが分かる。

5) *Anna uuas siu hêtan* (504).

6) *the uuas Archelâus/hêtan, heritogo helmberandero* (764f.)

(その者はアケラオと／呼ばれていた, 戦士達の將軍は)

7) *Mattheus uuas he hêtan* (1192)

(Got.) *Maþþaiu haitanana* (Mat. 9, 9)

(Tat.) *thie Matheus uuas giheizan* (20, 1)

ゴート語はこれに対応するギリシャ語 (*Ματθαῖον λεγόμενον* [λέγω の受動分詞 m. sg. acc.]) を逐語訳している。しかし、ここでも上記4)と同様「タツィアーン」ではラテン語 (*Matheum nomine*) に無い *uuas* を補い、書き換えられている。

8) *Sîmon uuas he hêtan* (1269)

9) *the hêtan uuas/Erodes aftar is eldiron, obarmôdig man*

(2704f.)

(その男は呼ばれていた／ヘロデと, 彼の始祖にちなんで傲慢な男は)

10) *Lazarus uuas he hêtan*, (3335)

(Got.) *unleds sums was namin haitans Lazarus* (Luk. 16, 20)

(ある貧しい者は, 名前はラザロと呼ばれていた)

(Tat.) *uuas sum arm betalari ginemnit Lazarus* (107, 1)

(ある貧しい乞食はラザロと呼ばれていた)

ギリシャ語原典は次の通りである。 *πρωτὸς δὲ τις ὀνόματι Λάζαρος. ὀνόματι* は *ἄνομα* の与格で原義は「名前に関しては」ほどの訳ができるであろう。しかしゴート語では *haitans* (*haitan* の過去分詞 m. sg. nom.) が付け加えられ *wesan* の過去 *was* と受動形を作っているように見える。「タツィアーン」のラテン語は *erat quidam mendicus, nomine Lazarus*

であり、奪格 *nomine* (名前に関しては、名前という点では) は過去分詞 *ginemnit* に書き換えられ、直前の名詞 *betalari* (*Bettler*) を修飾していると考えられる。ゴート語において *haitans* が *was* と結び付いているのか、或いは *Lazarus* と結び付いているのかは明確な決め手がないので結論は出せないが、ギリシャ語を逐語訳しているのなら *haitans Lazarus* (ラザロと呼ばれる者) という名詞句を成していると考えられる。

11) *Kaiphwas uwas he hêtên* (4147)

12) *Pilatus uwas he hêtên* (5129)

13) *Barrabas uwas hie hêtân* (5402)

(Got.) *bandjan gatarhidana haitanana Barabban* (Mat. 27, 16)

(バルバという名の悪名高い囚人)

(Tat.) *einan nothaft uuitmaran, therde uwas ginemnit Barabbas* (199, 2)

ゴート語は原典 *δέσμιον ἐπίσημον λεγόμενον* [Ἰησοῦν] *Βαραββᾶν* を逐語訳し、ギリシャ語に匹敵する過去分詞の名詞化の能力を示している⁹。他方ラテン語原典は *autem tunc vinctum insigne, qui dicebatur Barabbas* であり、「タツィアーン」は受動・未完了過去 *dicebatur* を *uwas ginemnit* で訳し、明白な分析的傾向を示している。

14) *Ioseph uwas hie hêtân* (5719)

(Got.) *manna gabigs ... , þizuh namo Iosef* (Mat. 27, 57)

(その名がヨゼフという金持ちの男)

(Tat.) *sum man otag ... , in namen Ioseph* (212, 1)

(名前がヨゼフである、ある金持ちの男)

ギリシャ語原典は *ἄνθρωπος πλούσιος ... τοῦνομα Ἰωσήφ* (n. sg. nom) で「ヨゼフという名の者が」であるのに対し、ゴート語は強意の指示代名詞 *þizuh* (m. sg. gen) を使い「その名がヨゼフという者」ほどの意味である。次に、ラテン語では *homo dives,, nomine Ioseph* であり、既に述べた例〔1) 4) 7) 10)〕と同様に、奪格 *nomine* を使用している。しかし、「タツィアーン」では *namen* (m. sg. dat.) に前置詞 (*in*) が加えられ、格の機能が前置詞によって補われている。

15) *Matheus endi Marcus, sô uuârun thia man hêtâna* (18)

16) Maria *uuârun* sia *hêtana* (5747)

以上の「ヘーリアント」からの例文1)－16)は、状態を表していると考えて良いだろう。また、ホルトハウゼン (S. 182) は、動詞 *hêtan* は *uuesan* としか使われない、と指摘しているが、これらの例だけでは *uuerðan* とは用いられないという結論は出せない。しかし、「タツィアーン」にも *heizan* が *uuerdan* と使われている例は無く、更に「オトフリート」にいたっては、他動詞としての *heizan* の過去分詞の用例は見当たらず、代わりに自動詞としての *heizan* が多数使われている。つまり「ヘーリアント」での自動詞 *hêtan* の使用回数は4回、「タツィアーン」(*heizan*) は9回であるのに対して、「オトフリート」では16回に昇る。このことから、「ヘーリアント」においては、自動詞と比較すると、動詞の意味がより感じられる他動詞が、多数用いられ、その内容を一層引き立てているといえる。

また、「タツィアーン」の分析的傾向が、原典と比較してみるとによって、明らかになったはずである。

3. *nemnian* (Got. *namnjan*, and. *nemnen*, nhd. *nennen*)

a) mit *uuesan* (2例) [*uuerðan* との用例は無い]

この動詞は、過去分詞としては2回しか使われていないが、ホルトハウゼン (S. 182) は *uuesan* とのみ用いられる動詞であると、注のなかで指摘している。使用例は次の2例である。

1) *thiu is aftar themu mânen ginemmid*,/aftar themu torhten tungle (3626f.)

(それ [エリコ] は月に因んで名付けられている／光り輝く星辰に因んで)

2) *thie môttun uuesan suni drohtines genemnide* (1318)

(その者たち [注：平和に暮らし、争いを起こさない人々] は神の子と呼ばれることができる。)

(Tat.) *uuanta sie gotes barn sint ginemnit* (22, 14) (Mt. 5, 9)

(その者たちは神の子と呼ばれるだろうから)

この箇所のごート語は欠落しているが、ギリシャ語を見ると *ὅτι [αὐτοὶ] υἱοὶ θεοῦ κληθήσονται* (その者は神の子と呼ばれるであろうから) とあり、nennen にあたる *κληθήσονται* は未来・受動形である。また、ラテン語でも *quoniam filiū deī vocābuntur* (*vocō* [nennen] の未来・受動形) である。しかし、上の例文から分かる様に、「タツィアーン」は「ヘーリアント」と同様、はっきりとした未来を示す語句を使っておらず、更にこの両者とも「呼ばれる」という行為を表しているにもかかわらず、本来使われるはずの *uuerðan*, *uuerdan* を用いていない。しかし、「タツィアーン」には *nemnen* が *uuerdan* と使われている例もある：

uuard imo ginemnit namo Heilant: thie namo uuard ginemnit fon engile (彼に救世主という名前が与えられた：その名は天使によってつけられた) (7, 1).

このラテン語 *vocātum est nōmen eius Ihêsūs; quod vocātum est ab angelō* (Luk. 2, 21) は完了分詞と *esse* (*sein*) を使って書かれていること、また上述した *giberan* の *mit uuesan* の 4) でも同じ例があったことから、「タツィアーン」ではラテン語の受動・完了相を書き換える時に *uuerdan* を使用したとも考えられる。いずれにせよ、今述べたことから、行為・動作を表す受動には必ず *uuerdan* を使うという一般性は、「ヘーリアント」と「タツィアーン」にはないことが分かる。

さて、次の *gidôn* も *uuesan* としか用いられない。

4. *gidôn* (ahd. *gituon*)

a) *mit uuesan* (9回) [*uuerðan* との使用例は無い]

1) *huene thu hêr an erðu eldibarno/gebinden uuillies: themu is bêðiu giduan* (3076f.)

(汝 [ペテロ] がこの地上で、人の子のうちで／枷をはめようと思う者：その者には二つのことがなされている)

この例は状態を表している。

2) Recht sô hie sia gihôrda thuo/seggian fan sô siecon, sô sprak hie sân angegin,/quað that Lazaruses legar ni *uuâri/giduan* im te dôðe, 'ac thar scal drohtines lof', quathie./'gifrumid uuerðan: *nis* it im te ôðron frêson *giduan*.' (3975ff.)

(彼 [キリスト] は彼女達 [マリアとマルタ姉妹] がその時/病人について話すのを聞いた時, すぐに答えて言った/ラザロの病は彼の死のためになされたのではない, 「そうではなく主の賛美が」と彼は言った, 「行われなければならない: それは彼の別の危険のためになされたのではない。)

(Got.) so siukei nist du dauþau, ak in hauheinais gudis
(Joh. 11, 4).

(その病気は死のためではなく, 神の栄光のためにある)

(Tat.) thisiu cumida nist ci tode, oh bi gotes diuridu
(135, 2)

(Otf.) „*Nist*“, quad er, „thiu ummaht so fram zi tod imo *braht*,/
io so in alawari zi druhtines diuri (3-23-19f.)

(彼は言った「その病気はただひとえに死のために彼に与えられたのではなく/誠に神の栄光のためである)

このゴート語の例も, ギリシャ語原典 *Ἀβτη ἡ ἀσθένεια οὐκ ἔστιν πρὸς θάνατον ἀλλ' ὑπὲρ τῆς δόξης τοῦ θεοῦ* の逐語訳である。「タツィアーン」もラテン語原典の *infirmitās hęc nōn est ad mortem, sed prō glōria deī* に従っているといえるだろう。「ヘーリアン」と「オトフリート」は, ギリシャ語・ラテン語にない動詞 *tōn* 及び *bringan* を加えている。これを考慮するなら, この二つの *gidōn* の受動は行為を表していると考えるのが妥当であろう。

3) that that uuitin alle,/man obar thesan middilgard, that it is thurh mīna minnea *giduan*/hêrron te huldi (4649ff.)

(次のことをすべての人が知るために/この世の人々が, 私の愛から, それ [キリストがパンと葡萄酒を弟子たちに与えること] が 行われることを/主への好意のために)

ここはキリストが, いつものように弟子たちにパンと葡萄酒を分け与え

るところであるから、その前後関係から、状態を表しているとは考え難い。

- 4) it *uwas* al bi thesun liudium *giduan*,/firiho barnun te frumu (5028f.)

(それはすべてこの人々のために行われた／人の子たちの利益のために) この例も動作を表している。

- 5) Ni *uwas* it thoh be is geurhtiun *gidôen*,/that ine thar an Hierusalem Iudeo liudi,/sunu drohtines sundea lôsen/adêldun te dôðe (5108ff.)

(しかし、次のことは彼の行いのためになされたのではなかった／エルサレムでユダヤ人達が／主の子に、罪の無い者に／死刑を宣告したということは)

死刑の宣告をしたのは一回限りの完了的行為であるから、「なされている」では意味にまとまりがなく、この場合も動作・行為を表していると考えるのが適切だろう。

- 6) al *uwas* imu that te hosce *gidôen* (5115)

(これはすべて [キリストに暴力を加えること] は嘲笑のために行われた)

- (Otf.) thaz in zi spile funtun (4-19-73)

([ユダヤ人は] これを [キリストに暴力を加えること] 遊びだと思った)

この場合は状態を表していると思ふことも可能かと思われるが、行為と考える方がより適切であろう。次の例7)も同様である。なお、ここで挙げた *gidôn* が使われている受動の例文には「ゴート語聖書」「タツィアーン」そして「オトフリート」のどれにも対応した文が見当たらない。例文2)にはかなり似ている文があるが、その他は、この例文6)の下に挙げたような、かなり異なった語句を使った例が見られるだけである。従って「ヘーリアント」のこれら *gidôn* の文は、それに固有のものといえよう。

- 7) all *uwas* im that te hoske *giduan*,/thoh hie it al githolodi, thiodo drohtin,/mahtig thuru thia minnia manno cunnies (5503ff.)

(このすべては [キリストを王に仕立てたこと] 彼を嘲笑するため
に行われた／彼はそのすべてに耐えたが、人々の主は／力ある者
は人類への愛のために)

- 8) *sagdun mid uuordon,/al sô it giduan uuas an thero drohtines
craft (5878f.)*

([墓の見張り番は] 言葉で言った／それ [キリストの復活] が主
の力によってどのようになされたのかを)

例文 7) 及び 8) は明らかに、動作を表している。

以上 1) から 8) の例文から、「ヘーリアント」においては既に述べた *hêtan* や *ginemnan* だけでなく、*gidôn* もまた *uuesan* としか結び付かないことが分かる。これらの動詞が現代ドイツ語の *sein* や *bleiben* と同じような、いわゆる特殊な動詞であるのかどうかは、ここでは明らかでない。しかし上記の諸例文を再度見るなら、どの例文の *gidôn* の過去分詞も、恐らく省略されてもその意味は通じるだろうと思われるのである。それだけ *gidôn* の意味が弱くなっている、と考えることもできるが、逆に「する、行う」という抽象的意味が強調され、英語の *do* に近づきつつあるのかもしれない、という推測も可能であろう。だが、いずれにしても「ヘーリアント」においては、動作・行為を表す受動と状態を表す受動との区別は、それほど厳密ではないことは確かである。次に、*gidôn* とおおよそ同じ意味を持つ *gilestian*, *gifrummian*, *gifullian*, *giuuirkian* を調べてみたい。

5. *gilestian* (Got. *galaistjan*, ahd. *geleisten*, nhd. *tun*, *ausführen*, *vollbringen*)

a) mit *uuerðan* (8回) [*uuesan* との使用例は無い]

uuerðan は過去形で 3 回、残り 5 回が現在形で使われ、すべて動作や行為を表している。現在形の例、4) から 8) では、未来を表すものもある。

1) *Thô uuarð it sân gilêstid sô,/giuuorðan te uuâron, sô thar an them uuîha gisprak/engil thes alouualdon (170ff.)*

(その時それは [ザカリアが啞になること] すぐになし遂げられた /実際に生じた, 神殿で言ったように /すべてを支配するものの天使が)

2) *Thô ni uuas lang aftar thiu, ne it al sô gilêstid uuarð (243)*

(その後長くはかからなかった, それ [神が約束したこと] がなされる までには)

3) *That gibod uuarð gilêstid/obâr thesa uuîdon uuerold (348f.)*

(その命令 [異国人は自分の故郷に帰り, 自分の名前を記入せよという] は行われた /この広い世界で)

(Got.) *Warp þan in dagans jainans, urrann gagrefts fram kaisara Agustau (Luk. 2, 1)*

(その時起こった, 皇帝アウグストから勅令が出た)

(Tat.) *Uuard thô gitân in then tagun, framquam gibot fon ðemo aluualten keisure (5, 11)*

(その時行われた, すべてを支配する皇帝から勅令が出た)

(Otf.) *Wuntar ward tho maraz joh filu seltsanaz,/gibot iz ouh zi waru ther keisor fona Rumu (1-11-1f.)*

(出来事はその時起こった, 気掛かりでまったくまねなことが /命じられたそれを誠に, 皇帝はローマから)

ゴート語は原典 *Ἐγένετο δὲ ἐν ταῖς ἡμέραις ἐκείναις* に従っているが, 「タツィアーン」はラテン語 *factum est* を *uuard gitan* と訳している。「オトフリート」の *ward* は, ゴート語 *uuarþ* (*geschah*) とほぼ同じ意味で使われている。

4) *Al uuirðid gilêstid sô/umbi thînes barnes lif, so thu bâdi te mi (3026f.)*

(すべては行われるであろう /汝の子の命に関しては, 汝が私に頼んだように)

(Otf.) *nu werden al thio dati so thu mih hiar nu bati (3-10-44)*

(今や行いはすべて生じる、汝が私にここで今頼んだように)

「オトフリート」では上記3)と同様, *werdan* は単独で完全な本動詞として用いられ, 過去分詞を伴っていない。これに対し, 「ヘーリアント」では *uuerðan* は過去分詞 *gilêstid* と共に使われ, さらに *gilêstid* は第一半行 (Anvers) *an thene liudi drohtin* (人々の主への [信仰]) にある *liudio* と頭韻を踏み, この詩文のリズムと内容に力動感を与えている。残りの4例の *gilêstid* もすべて押韻している¹⁰。5) *liðan scoldin: 'thar uuirðid all gilêstid sô* (3522) (行かなければならない, そこ [エルサレム] ではすべてが次のようになされる), 6) *endi uuirðid al gefullod sô, gilêstid an thesumu lihte, so ik for thesun liudium gespriku* (4350f.) (そしてすべては成就される/この世でなし遂げられる, 私 [キリスト] が人々の前で話すように), 7) *Thesa quidi uuerðad uuâra, liudium gilêstid, sô huemu sô hêr gilôbid te mi* (3919f.) (この教えは真なるものになり/人々に行われる, ここで私を信じている者に), 8) *it uuirðid al so gilêstid, sô thu gelôbon habas/an thinum hugi hardo* (2153f.) (それ [自分の子供の病気が治ること] はなされるであろう, なぜなら汝は信仰を持っているから/汝の心に, 強く)。

以上から, *gilestian* は *gidôn* と似ている意味を持ちながらも, *sein* とは結び付くことはなく, 常に *uuerdan* と結び付き動作や行為を表すことが分かり *gidôn* の特殊性が明るみに出る。

6. *gifrummian* (ahd. *frumman*, nhd. *tun*, *vollbringen*, *ausführen*)

a) mit *uuerðan* (3回)

1) *that uuarð all mid uuordon godas/fasto bifangan, endi gifrummid after thiuh, hiulic liudscepi landes scoldi/giuualdan* (42ff.)

(それ [創造物] はすべて, 神の言葉で/固く囲まれた。そして, その後でなされた, /どの民族が国を支配すべきかが)

この例は, 事象受動と考えられる。残り2例もやはり行為や動作を表して

いる。また, gifrummian はすべてここでも押韻に使われている。2) *thâr uuirðid all gilêstid sô,/gefrumid undar themu folke, sô it an furndagun/uuise man be mi uuordun gesprâkun* (3522ff.) (ここでは、すべてが行われる／人々の間でなし遂げられる, 以前／賢者が私について言葉で話したように), 3) ‘*ac thâr scal drohtines lôf, quathie,/ ‘gifrumid uuerðan: nis it im te ôðron frêson giduan.*’ (3978f.) 「そうではなく主の賛美が」と彼は言った「なされなければならない: それ [ラザロの病氣] は別の危険のためになされたのではない」。

b) mit uuesan (1回)

1) *uuârun im sô acumana thuo noh/gie sô forahta gefrumida—: giuuitun im forð thanan*(5869f.)

([マリアたちは] その時までとても驚いていた／そして非常に怯えていた——: そこから立ち去った)

この例は明らかに状態を表している。forahta は形容詞 forahht の複数・女性・主格であり, gifrumida にも同様の格語尾が付けられている。その前の acumana も過去分詞 acuman で, しかも使用例はこの一回限りしかなく, 動詞というよりも, ほとんど形容詞として使われていると考えられる。そして, forahta gefrumida も acumana と同じく, 形容詞的に使用されていると考えた方が良いだろう。また「オトフリート」では古ザクセン語 gifrummian に対応する gifrumman は, 全部で4回しか使われておらず, しかもこの4回には過去分詞は含まれていない¹¹。しかしこれに対し「ヘーリアント」では過去分詞10回を含め, 合計で37回使用されている。

*Ûbbiandi astândan. Nu habit hie all gilêstid sô,
gifrúmid mid firihon: ïliat gi nu fôrð hinan*
(5862f.)

([キリストが] 復活し蘇ることになっていると。今彼はすべてのことを行った／人々のもとでなし遂げた: 今ここか

ら急いで行け)

この例では、*giêstid*, *gifrumid* と同義語が繰り返され、さらに *l* は 2 度、そして *f* は 3 度押韻を踏み、これらの動詞が表す躍動感と、快いリズム感を伴う響きに乗って、聖書の内容が聴衆たちに伝わっていく。

7. *gifullian*

a) mit *uuerðan* (1 回)

1) *êr than uuerðe gefullid sô,/mînu uuord giuuârod* (4347f.)

(実現されるまで／私の言葉がなし遂げられるまで)

uuerðe は希求法現在である。この例では訳の通り、未来における行為を表している。

b) mit *uuesan* (1 回)

1) *Thia liudi gisâun,/that thanan bluod endi uuater bêðiu sprungun,/uuellun fan thero uuundun, al sô is uuillio geng/ endi hie habda gimarcod êr manno cunnie,/firiho barnon te frumu: thuo uuas it all gifullid sô* (5708ff.)

(人々は見た／そこから [傷口から] 血と水の両方が流れ出るのを／傷口から吹き出るのを、彼の意思の通りに／そして、彼が以前人類に取り決めていたように／人の子に、利益として：その時そのすべてはなし遂げられた)

(Tat.) *inti sliumo uzgieng bluot inti uuazzar. Thaz giscrib uuari gifullit* (211, 4)

(そしてすぐに血と水が流れ出た。その言葉がなし遂げられるように)

「タツィアーン」のこの箇所原文出处は *Ut scriptûra impleatur* (Joh. 19, 36) で、動詞 *impleatur* は接続法・受動相・現在である。

(Tat.) Thaz *vuurdi gifullit thaz giquetan uuas* (9, 4)

(言われたことがなし遂げられる)

上の impleatur に対してこのラテン語は adimplêretur (Mt. 2, 15) で、同じ接続法・受動相であるが、時称は未完了過去である。「オトフリート」のこれに対応する部分は

(Otf.) Tho *ward thar irfullit, thaz forasago singit* (1-19-19)

(その時なし遂げられた, 予言者が伝えていることは)

であり、直説法・過去 *ward* と過去分詞 *irfullit* である。

(Tat.) Thô *uard gifullit thaz thar giquetan uuas* (10, 2)

この例の原文は adimplêtum est (Mt. 2, 17) とあり、「タツィアーン」と同じ直説法であるが完了形になっている。

これらのことから、及び前に述べたことから、「タツィアーン」は、原文における受動の現在と未完了過去及び完了を *uuesan* と *uuerdan* を使って訳し分けていることが分かる。

上の「ヘーリアント」の例 *uuas gifullid* は、状態を表しているとはいえない。従って、ここでもまた「ヘーリアント」においては、事象受動と状態受動の統語的形式は、まだはっきりと定式化されていないことが分かる。

だが先に指摘したように、この *gifullid* も、リズムに関しては頭韻の役割を果たすと共に、意味の点でも受動によって、ゲルマン的な力強さを聞き手や読者に与えている。特に最後の詩行

firiho barnon tef rúmu: thuo uuas it all gifúllid sô (5712)

では、この韻文詩で最も多用され最もリズムカルで力強い頭韻の技法が使われている。

8. *giuuirkian* (got. *gawaúrkan*, ahd. *giwirken*, nhd. *tun, machen*)

a) mit *uuerðan* (3回)

- 1) that thar *uuarð* gumono barnun/*giuuarht* fan thesaro uue-
roldes endie: iu habad geuuíhid selbo (4393f.)

(それ [帝国] は人の子たちのために / この世の始めから興されて
いた: [あらゆる人々の父は] 汝らのために [帝国を] 自ら守ら
れた)

この箇所に対応する「タツィアーン」では inti gisizzet iu garo rihhi
fan anaginne uueralti (152, 3) (世の始めから汝らのために準備されて
いる帝国を持ちなさい) とあり, 原文のラテン語も possídetes parátum
vôbis rēgnum (Mat. 25, 34) で, parátum=garo と iu=vôvis の語順
が逆になっているがおおよそ逐語訳といってよい. 他方, ギリシャ語では
κληρονομήσατε τὴν ἡτοιμασμένην ὑμῖν βασιλείαν ἀπὸ καταβολῆς κόσμου と
あり, *ἐτοιμάζω* の受動・完了分詞・女性・単数・対格 *ἡτοιμασμένην*¹² が
形容詞的に使われ, ラテン語と「タツィアーン」の例での純粋な形容詞と
は, 異なっている.

以上のことから, 「ヘーリアント」の受動 *uuarð giuuarht* は完了的な
意味で使われ, 単なる過去形ではないと言えよう.

「タツィアーン」では原文のラテン語が, いわゆる分析的な完了形であ
る場合, それを *uuerdan* + 過去分詞で訳していることは既に述べたが,
この点に関して「ヘーリアント」の次の例を参考にして検討してみよう.

- 1) Thô *uuarð* thiu tíd *cuman*, —that thar gitald habdun/uuísa
man mid uuordun, —that scolda thana uuíh godes/Zacharia
s bisehan (94ff.)

(そのとき, 時が来た, —賢人達は言葉で予測していたが— 神
殿をザカリアが世話しなければならない時が)

- 2) nu *is* the hêlago Krist,/uualdand selbo an thesan uuíh *cuman*
(521f.)

(今や聖なるキリストが / 支配者御自身が, この神殿に来られた)

例文 1) では, 自動詞 *kuman* の過去分詞 *cuman* は *uuarð* と共に

使われているのに対し、例文 2) では現代ドイツ語と同じように is (ist) と用いられている。この例 1) と 2) の違いはどこにあるのだろうか。

ゲーリング (H. Gering) は、ゴート語の *wesan* と *wairþan* の受動に関して、次のように述べている。「ist と was による形式は、前者が現在の持続 (Dauer) を、そして後者が過去の持続を表す。これに過去分詞が組み合わせられて、主語が、なし遂げられ終了したものとして存在しているか、存在していたかが表される。他方, *warþ* に過去分詞が組み合わせられて過去において生じた行為 (Handlung) を、また *wairþ* と過去分詞とで現在における行為を表す」¹³。ゲーリングは、分析的受動における助動詞が持つ本来の意味を強調し、過去分詞はそれに、いわば補足的に付け加えられているとしている。つまり、彼は *wesan* 及び *wairþan* は、受動の助動詞として過去分詞と結び付いているのではなく、本動詞として「・・・である」「・・・になる」という意味を持っていることを、暗に示している。これに伴って過去分詞も独立性が強調され、形容詞的或いは名詞的な特徴を持つことになる。

上の自動詞 *kuman* の完了に関し、ゲーリングの見解に従うなら、1) は過去の動きを表し「時が来たものになった」ほどの意味を、2) は「キリストは来たものである」ほどの意味を表すことになるであろう。このような観点に立つ場合、この *kuman* と *uuarð* の構文は分析的な完了形ではなく、*kuman* が一種の述語として使われている構文であり、分析的完了形は、ゴート語においては、まだ明確な形式を与えられていないと言わなければならない。しかしながら、既に見たように「タツィアーン」においては、ラテン語の時称が *uuesan* と *uuerdan* を使って区別して表され、そのため、*uuesan* が用いられた受動文でも、状態ではなく、動作や行為を表していると思わなければならない例があった。

しかし、これまで見てきたように、「ヘーリアント」には統語形式と時称の意味とに完全には平行関係はない、つまり、一定の統語形式に一定の時称が割り当てられてはいない場合があるのである。このことは、「タツィアーン」と同様、細かな時称を表すために、特定の統語形式が取られたことを示唆しているのであろうか。それとも単に文法形式が、まだ不統一であったことを示唆しているのであろうか。このことに関して、更に調べ

てみよう。

次は *giuuirkian* の残りの 2 例である。

- 2) *Thuo uuarð thar an middian dag mahti tēcan/uuundarlîc giuuarah̄t ōbar thesan uuerold allan* (5621f.)

(その時、正午に強力な印が／驚くべき印が行われた、この世すべてに)

この例は事象受動である。そして次の例も事象を表している。

- 3) *sô uuarð s̄an after thiu/uundartēcan giuuarah̄t* (5659f.)

(その後すぐに／奇跡の印がなされた)、

3. ま と め

「ゴート語聖書」, 「タツィアーン」においては、原文の時称の区別を訳文でも示そうとしていた。例えば、「タツィアーン」においては原文の受動・現在完了 *n̄atus est* を *giboran ist* (6, 2 など) で訳し、受動・未完了過去 *diceb̄atur* (199, 2) を *uwas ginemnit* で、また、受動・接続法・過去完了 *n̄atus esset* (8, 1) を *giboran uuard* で翻訳している。しかし、原文が受動・現在完了 *voc̄atum est* であるにもかかわらず、それを *uuard ginemnit* (7, 1) で訳している例もある。この *uuard ginemnit* では、助動詞 *uuerdan* が示しているように、動作が表されているが、別の例 *sint ginemnit* (22, 14) ではラテン語 *voc̄abuntur* (受動・未来) を訳しており、*sint* が使われているにもかかわらず、動作を表している。

一方、「ヘーリアント」においては、*h̄etan*, *ginemnan* 及び *gidôn* は *uuesan* としか結び付かず、しかも助動詞が *uuesan* であるにもかかわらず、いくつかの例は動作を表している (5503ff. などである)。さらに、このなかでも *gidôn* は、英語におけるような助動詞的な特徴を窺わせた。しかし、助動詞 *uuerðan* による受動は、これまでの調査範囲内では、残らず動作や事象を表している。特に、*uuerðan* による受動には、完了的な意味を表す例 (4393f.) がある。これと関連し、「ヘーリアント」においては *uuerðan* による自動詞の完了があり、動作や事象を強調する用法と思われる。おそらく受動においても、助動詞 *uuerðan* を用いて行為などを強調する用法があったと推測される。この用法は、再帰代名詞による中

動相的な使用と共通するものがあり¹⁴、詩の動的な雰囲気高めるとともに、古ザクセン語が有するゲルマン的な特徴として指摘できる。

(続く)

注

- 1 ゴート語には、総合的統語形式として受動態があったが、時称が現在に限られていた。また、「ヘーリアント」においては、再帰代名詞による受動表現が多数見られる。これに関しては、拙論『「ヘーリアント」における古ザクセン語の再帰代名詞の用法—中動相を参考に—』、関西大学独逸文学会「独逸文学」第37号(1993年)参照。
- 2 拙論『受動と完了—史的—考察—』、「独逸文学」第38号(1994年)参照。
- 3 拙論『Passiv について—Zustandspassiv を中心に—』「独逸文学」第33号(1989年)参照。
- 4 ホルトハウゼン(注5参照)は過去分詞の項目で、受動に関して簡単に触れているにすぎない。
- 5 Ferdinand Holthausen: *Altsächsisches Elementarbuch*, Heidelberg 1921. S. 182.
- 6 ギリシャ語、ゴート語及び古ドイツ語の引用文は次のものに拠った。
K. Aland, M. Black, C. M. Martini, B. M. Metzger and A. Wikgren (edit.): *The New Testament, Greek and English*. New York 1975.
Streitberg, Wilhelm (hrsg.): *Die gotische Bibel, 1. Teil: Der gotische Text und seine griechische Vorlage mit Einleitung, Lesarten und Quellen-nachweisen sowie den kleineren Denkmälern als Anhang*. Heidelberg 1908, 2. Teil: *Gotisch-griechisch-deutsches Wörterbuch*. Heidelberg 1910.
Sievers, Edward (hrsg.): *Tatian*, Paderborn 1966.
Erdmann, Oskar (hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch*, Tübingen 1965.
Behaghel, Otto (hrsg.): *Heliand und Genesis*, Halle 1948.
- 7 êr than の従属文には uuerðan がよく使われる。例えば 4347, 4566 などである。
- 8 ゼールトは「ヘーリアント」の辞書の中で、所々に対応するラテン語聖書からの引用文をのせている。Edward H. Sehr: *Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis*, Göttingen 1966.
- 9 拙論『ゴート語聖書における分詞の用法—ギリシャ語原典との比較—』、「独逸文学」第39号(1995年)参照。

- 10 Edward Sievers は、ゲルマン語の詩の韻律を次の五つの型に分類している。
 ´は第1強勢, `は第2強勢, xは弱勢を示す。また, —は長音節を表している。

A 型 ´ x | ´ x
 B 型 x ` | x ´
 C 型 x ´ | ´ x
 D 型(a) ´ | ´ ´ x
 (b) ´ | ´ x `
 E 型 ´ ` x | ´

詩の各行は二つの半行から成り、前半を第1半行 (Anvers), 後半を第2半行 (Abvers) と呼ぶ。各行には原則として、揚音部 (Hebung) を持つ二つのタクト (Takt) がある。頭韻は必ず揚音部に置かれるが、第1半行では、第1揚音部にある場合、第2揚音部にある場合、その両方にある場合の3通りがある。一方、第2半行では必ず第1揚音部にある。それを示すと以下の様になる
 a = alliterierendes, x = nicht alliterierendes betontes Wort.

- a) a x a x
 b) x a a x
 c) a a a x
 d) a₁a₂ a₂a₁

上の d) は詩行交差配列 (Verschiasmus) と呼ばれ、二つの頭韻を持つ。

- 11 4-8-26, H103, 4-3-13, 4-20-34の4回である。
 12 ギリシャ語には *ἔτοιμος* という形容詞もある。
 13 H. Gering: *Über den syntaktischen Gebrauch der Partizipia im Gotischen*; in: *Zeitschrift für deutsche Philologie* Bd. 5, Halle 1874. S. 173.
 14 拙論1993年, 及び Clopton, Laura Dale: *Dative reflexive motion verbs in Old Saxon: syntax, semantics and discourse*, Michigan 1994 参照。

参 考 文 献

- 1 Piper, Paul: *Otfrids Evangelienbuch. Mit Einteilung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriß der Grammatik, 2 Teil*, Freiburg 1887.
 2 Kelle, Johann: *Glossar der Sprache Otfrids*, Aalen 1881.
 3 Erdmann, Oskar: *Otfrids Evangelienbuch*, Halle 1882.
 4 Shimbo, Masahiro: *Wortindex zu Otfrids Evangelienbuch*, Tübingen

1990.

- 5 Genzmer, Felix: *Heliand und die Bruchstücke der Genesis*, Stuttgart 1989.
- 6 森田貞雄, 三川基好, 小島謙一『古英語文法』, 東京, 1989.

Das Passiv und das Perfekt

— Das Passiv im „Heliand“ im Vergleich mit der griechischen, lateinischen, gotischen Bibel, „Tatian“ und „Otfrid“ —

Akira SHIDA

Im klassischen Latein und Griechischen verwendet man synthetische Verbalformen. Im Laufe der Geschichte gingen sie jedoch in analytische über. Dennoch finden sich im Gotischen Reste des indogermanischen Mediopassivs in passivischer Verwendung, das jedoch auf den Indikativ und Optativ des Präsens beschränkt ist. Um diese Armut des gotischen Ausdrucks auszugleichen, werden zusammengesetzte syntaktische Formen gebraucht. Aber sie konnten nicht die stabile Position in der Grammatik gewinnen wie im Neuhochdeutschen: die Eigenschaft des Partizips Präteritums tendiert zum Adjektiv und Substantiv.

Im Altdeutschen verdrängt jedoch der analytische Satzbau schließlich synthetische Struktur. Zum Beispiel wurde das Passiv analytisch gebildet. Obwohl es eine bestimmte Stellung im altdeutschen Sprachgebrauch erhalten konnte, gab es keinen so strengen syntaktischen Unterschied zwischen Gebrauchsweise mit *uuesan* (*sein*) und *uuerðan* / *uuerdan* (*werden*). Das Hilfsverb *uuesan* bezeichnet nicht immer einen Zustand und *uuerðan* / *uuerdan* einen Vorgang. Der Satz: *Lazaruses legar ni uuâri/giduan im te dôðe* (3977f.) bedeutet nicht einen Zustand, sondern einen Vorgang und der Satz: *that thar uuarð gumono barnun/giuuarht fan thesaro uueroldes endie* (4393f.) bezeichnet nicht einen Vorgang, sondern einen perfektivischen

Zustand.

Warum gab es diese syntaktische Unregelmäßigkeit? Einen Hinweis bieten zwei Zitate aus „Tatian“: *uuanta sie gotes barn sint ginemnit* (22, 14),, und: *uuard imo ginemnit namo Heilant* (7, 1). Die beiden Zitate enthalten zwar das gleiche Partizip Präteritum *ginemnit* und bezeichnen Vorgänge, aber die damit verbundenen Hilfsverben sind nicht gleich. Der Verfasser von „Tatian“ hat wohl den Unterschied in dem lateinischen Original auch ins Althochdeutsche übersetzt. Das Original lautet: *quoniam filii dei uocabuntur* [Futur, Passiv] (22, 14), *vocatum est eius Ihesus* [analytische Struktur, Perfekt, Passiv] (7, 1).

Könnten wir die gleiche syntaktische Erscheinung auch im „Heliand“ erwarten? Eine positive Möglichkeit geben uns die nächsten Zitate aus „Heliand“: [1] *Thó uuarð thiū tid cuman* (94), [2] *nu is the hêlago Krist ... cuman* (521f.). Das Zitat [1] betont die Handlung „*cuman*“, Zitat [2] dagegen den durch die Handlung hervorgerufenen Zustand. Daher könnten wir sagen, daß das Passiv mit *uuarðan* etwas Perfektivisches, dagegen das mit *uuesan* etwas Fertiges und Dauerndes bezeichnet.

Die Partizipia Präterita, die im „Heliand“ sehr häufig gebraucht werden, spielen eine entscheidende Rolle in der wichtigsten poetischen Ausdrucksform der Germanen: der Alliteration.

*f*iriho barnon te *f*rúmu: thuo uuas it all gifúllit sô

Der alliterierende Konsonant *f* klingt schön und rhythmisch. Diese poetische Technik <Alliteration> hat wohl die Sachsen angezogen und der Evangelisation außerordentlich gedient.